

最優秀賞

神奈川県教育長賞

車椅子から見た世界

葉山町立南郷中学校

三年 土屋

虹

みなさんは体の不自由な方にどんな接し方をしますか。人それぞれだと思いますが、普段からその状況を考えている方も少ないでしょう。僕はある経験から、多くの人にこのことを考えてほしいと思いました。

おとしの年末、僕はスノーボードをしていて木にぶつかり、大腿骨をひどく骨折しました。数時間かかる大きな手術を受け、その後九ヶ月間、それまで当たり前だと思っていたたくさんのことができなくなりました。今振り返ってもうんざりする経験でしたが、僕はこの怪我から、大切なことを学びました。

一つめは体の不自由な人にとって街がどんなふう感じられるかということです。僕は手

術の後数か月は足をつくことを禁じられたため、歩くことができなくなりました。外に出るときは車椅子を使わなくてはなりませんでした。すると、いつもとは全く違う世界が広がっています。これまで何とも感じなかった小さな段差も乗り越えるのにひと苦労しました。自分でも歯がゆいし、周りの人が僕にいらついているのではないかなどと考えて、周りからの視線がとても嫌でした。そのときの僕は恥ずかしくてその場から消えたいと思うほどでした。周りの視線は人それぞれで、同情してくれる人もいましたが、見るからに迷惑そうな表情をされることもありました。僕はそのとき家族といたので、まだ心の支えもありましたが、もし一人だったら、もつとつらい気持ちになつていたかもしれません。

また、車椅子で街の中の通りを行くと、自分の目線がいつもより低いので遠くまで見通せません。人が多いところでは周りがよく見えないし、車の正面の高さが自分の目線と同じくらいなので怖さも感じました。街で時々車椅子の人を見かけますが、みんなこんな感覚でいたのだと初めて理解しました。僕が車椅子でしか外出できなかった期間は数か月ですし、いつも家族と一緒にだったので本当に怖い経験はしませんでした。一生車椅子に頼らなければならぬ人にとつて、街のあり方は切実な問題だと思えます。

僕は毎週リハビリに通っていました。そこには、僕より重い怪我をした人、病気で体が不自由になった人、脚や腕を失ってしまった人などたくさんの方がいました。僕自身は時間がかかるが必ず治ると言われていたので、いつかは「当たり前」が戻ってくるとわかっていました。それでもリハビリはつらい時がありました。そんな時僕を励ましてくれたのは、同じ

場所にはハビリに来ていた人たちでした。ある二十代の男性は重い怪我をして一生障がいを負っていかねばならないということでしたが、とても元気でいつも楽しそうな人でした。怪我に対しての思いやこれからどうするかなどを話しながら、僕を励ましてくれました。ほかにも何人もの人たちが僕に声をかけてくれました。みな明るく、たくさんの夢をもっていました。僕が同じ立場だったら考えられないことです。もう大好きな運動ができないとか、自由に出かけられないなどとネガティブな考え方をすると思いますが。でも、この人たちはこれから見据えて励ましあっていました。僕は胸が熱くなり、尊敬の気持ちでいっぱいになりました。

僕が怪我から学んだ二つめのことは、リハビリで出会ったこの人たちの心の強さです。身体が不自由になっても目標をもって前向きに努力し、自分のできることを見つけようと頑張る人たちがいるのです。自分も苦しいのに、他人を励ますほどの大きな心をもてる人間になりたいと強く思いました。

僕の怪我は、障がいをもつ人が安心して暮らせる社会を作るために、またその人たちの支えになるために何かしたい、と僕に目標を与え、視野を広げてくれる貴重な経験になりました。